

2011.9.6 (第1稿)

震災ボランティア活動に参加して

電制制御工学科 准教授 細谷和範

2011年3月に起きた震災で被災された方々、また先日の台風12号(T1112)で被害にあわれた方々にお見舞い申し上げます。

東日本大震災の後、メディアを通じて被害の状況や復興に向けた動きも報じられるようになった頃、何か私でもできることがあるだろうと現地行きを決意し、準備を始めていました。ちょうど同じ考えを持っておられた機械工学科の大野先生とともに6月初旬の2日間、気仙沼市本吉町にて倒壊家屋の瓦礫撤去のボランティア活動に参加しました。現地の状況はTV映像そのものでしたが、実際に現場に立つと、あまりに凄惨な光景に頭が混乱したのを覚えています。また、津波により沿岸から数kmのエリアはどこも壊滅状態で、破壊された町並みが南北に延々と続いており、時折、ご遺族が合掌されている光景を見かけました。ボランティア活動はボランティアセンター(VC)を通じて行い、数名のチームを組んで要請に対応します。私達が参加したVCでは25歳くらいから70歳くらいまでの方が参加され、我々のような公僕に近い団体職員や会社員の他、仕事を辞めてきた人も少なからずいました。

活動1日目は三陸鉄道沿線の倒壊家屋の瓦礫撤去に参加しました。家は海岸からやや離れた標高が10m以上ある場所でしたが、家屋は横倒しになっていました。我々のチームは我々素人組とチェーンソーなど工具が扱える上級ボランティアで構成され、倒壊した家屋を解体し、瓦礫を木材、金属に分けて道路脇に積み上げる作業を行いました。現場では汗をぬぐったり、食事の煮炊き、洗い物などに井戸水を利用していました。もちろん、皆上下水道が壊滅した地域の地下水の水質が危ないとわかっていますが、水が不足している現場では使わざるを得ない状況でした。作業の合間の休憩時には家主のご家族とお話をしました。ご家族が津波の引き潮に飲まれ、目の前を流されていった話に私達はかける言葉を見いだせませんでした。皆さん本当に気さくで気丈に振る舞われていました。

2日目は漁港そばの斜面に散乱した瓦礫を撤去する作業に参加しました。すぐ横の海では、自衛隊艦艇とヘリコプターが人捜しを継続していました。瓦礫の中には子供の写真やオモチャも出てきましたが、安否はわかりません(無事であれば良いのですが・・・)。足場の悪い斜面での作業はベテランでも危険で、作業中にチームの一人が足を滑らせて斜面を落ちていきました。落ちた先は釘やガラスが重なった瓦礫の山です。幸い怪我はありませんでしたが、未来のある学生さんはこの手の作業はするべきでないと思います。

現在、ボランティア活動は個人宅の修繕や仮設住宅への引っ越し作業、心のケアの一環として話を聞く活動がなされていると聞きます。瓦礫のように「物理的に対処できる課題」から、「目に見えないこころのケア」にシフトしているように思います。強い恐怖や絶望感

は短期間に回復することは難しいでしょうから、今後も継続的なボランティア活動が求められるのではないのでしょうか。参加を検討されている学生さんは是非現地の情報を十分に集め、「自己責任」の意味を十分に理解してから決断されることを勧めます。また、これは警告ですが、危険とされているところへの立ち入りや危険と思われる行為は、若さゆえの好奇心があっても絶対に踏み込まないように。また学生さんには是非、出所不明な情報で噂に右往左往したり、知ったかぶりせず物事を見て欲しいと思います。日々の勉強を通じて、正確に状況を判断できる能力と行動力を養って、将来の復興に尽力してくれることを期待しています。

